

1

a

生半可

b

演

じ

c

終始

2

長らく五月

3

A

キヤップ

B

され

4

ウ

5

すぐに母親

6

(記述題)

7

(記述題)

8

ア

9

親の死に目

10

イ

2

a

断念

b

人材

c

自負

2

エ

3

C

4

X

エ

Y

か

Z

風

5

イ

6

積極的

7

勝算

8

I

ウ

II

才

9

1

お人よし

2

損な役回り

10

イ

11

(記述題)

1

6

有名人である母のことを知る人がいないところ  
でのびのびと生活したいから。

(同意可)

7

娘を心配させないために自分の病気のことを  
ふせるよう田所にたのんでいたところ。

(同意可)

2

11

る	体	通
か	験	常
ら	し	の
。	、	仕
	高	事
	い	で
	評	は
	価	得
	や	ら
	人	れ
	脈	な
	を	い
	得	成
	ら	功
	れ	を

(同意可)

「配点」

1 1  
6 1  
7 3

2 2  
11 1  
4 8

各 2 点 × 13 = 26 点  
各 6 点 × 3 = 18 点  
各 4 点 × 14 = 56 点

①

- 1 a 「生半可」は中途半端なこと。bの「演じる」は「寅」の中の部分を「由」のようにしないこと。c 「終始」は始めから終わりまでということ。
- 2 前半は飛行機の機内でのこと、後半は帰国後のできごとである。回想している内容と今の場面の内容をきちんと整理して読み進めなければならぬ。
- 3 A 「ハンディキャップ」は、その人が負っている不利な条件のこと。B 「押しも押されもしない」は名実ともに認められていること。
- 4 ひかるの不満は、母が特別な有名人であるせい、ふつうにあつかってもらえないことであった。アでは母を不憫に思う気持ちが根本にあることになる。イは――線①の理由ではなく、①のせいで生まれた思いである。エはもともと大人になってからのことである。
- 5 あの女女優、堂本あかりの娘が自宅に来るということでわざわざ全員が集まったというのである。父親などは仕事を早めに切り上げたのかもしれないし、中学生ともなると学業や部活動で、ふだんの夕食に全員がそろうことはめずらしいものである。大スターの娘を一目見ようと、あわよくば何か聞き出そうとしているのだろう。
- 6 「地の果て」のような辺境の地に行きたい理由が特に書かれていないことに気づかねばならない。この娘の心を占めているのは常に母のことであった。通読時に気づいていたはずのことである。
- 7 いつもそつげなく常にマイペースをくずさないように見える母だが、電話が「いつも母のほうから」というところに、外国で一人暮らしをする娘を心配する気持ちが感じられる。「絶対……言わないで」「死ぬ間際まで、言い続けて」というところに必死の思いがにじんでいる。「死んでから呼ばばいい」ということは、知らせたくないとか会いたくないというのではない。自分のいないところで自由に暮らす娘のじやまをしたくないのである。本当はひとりっきりのわが子に会いたいはずである。
- 8 なみだ雨ということばがある。イヤウでは女優あかりを悪人あつかいしていることになる。エでは雨が降ったらあまり弔問に行かないことになる。
- 9 この場面が、直前の告別式の場面とちがうことがわかっていただろうか。帰国してすぐに母の亡骸が眠る自宅にもどったひかるに会った田所の、開口一番のせりふである。何を謝っているのかは続くせりふにはつきりと書いてある。
- 10 「亡骸なのだとはどうしても思えなかった」とあった。大人になるにつれて遠ざけるようにした母であったが、母の病気のことも知らず、まだまだ死ぬような年ではなかったのにわか信じていたのだから美しい死顔からもよけいにそう思えるのだろう。「涙は、ひと粒もこぼれなかった」のでアやエはあてはまらない。かといってウのように母をうらむような思いがあるわけではない。

②

- 1 a 「断念」は希望していたことをやむをえずあきらめること。b 「人材」は有能で役に立つ人。c 「自負」は自分で自分の能力に自信をもち、ほこりに思うこと。
- 2 苦笑いである。「悲しそうな表情」「後悔があったのかもしれないかもしれません」などから積極的に引き受けたのではないことが感じられる。ア「冷笑」はさげすんで冷ややかに笑うこと。あざ笑うこと。イ「談笑」は笑いながらうちとけて話をする。ウ「失笑」は思わずふき出して笑ってしまうこと。ばかにした笑いであることも多い。
- 3 A・Bは火中の栗を拾わなければよかったという後悔、Cは火中の栗を拾っておけばよかったという後悔である。
- 4 Xは強いものには逆らわずに従った方が得だということ。ア「漁夫の利」は両者の争いにつけこんで第三者が利益を横取りすること。イ「寄らば大樹のかげ」は頼るのなら力のあるしつかりした者を選ぶべきだということ。ウ「帯に短したすきに長し」は中途半端で使いものにならないこと。エ「鶏口となるも牛後となるなかれ」は大きな集団の低い地位よりも、小さな集団でもその長になるほうがよいということ。
- 5 「果たしてそれは本当に正しいのでしょうか？」という疑問を、直後で「火中の……避けるべきなのか？」とくり返し、「いいえ、そんなことはありません」と述べて「積極的に拾って得する栗」の話につなげている。「勝ち馬に乗れ」「長いものに巻かれる」は火中の栗を拾うのとは反対の安全策をよしとする考え方である。アでは吉川さんの思いを押し量ったあと疑っていることになるが、そのような話にはなっていない。ウでは「勝ち馬に乗れ」派が多いうことを疑っていることになる。エでは火中の栗は拾わないほうがよいということになる。
- 6 リスクが大きく損な役回りになることが多いのが火中の栗だが、これは自分のプラスになるので拾った方がよい火中の栗である。
- 7 社内の人が知らない、よい情報をつかんでいたのである。うまくいく見込みがあったことになる。「一語」というのは一単語のことなので、修飾語などをつけずに答えなければならぬ。
- 8 I 商社マンとして海外勤務を試みたかったし政情不安は解決しそうで勝算もあったから七割がた決意していた↓そこで↓妻に事情を説明した。  
II 妻に事情を説明した↓しかし↓妻は引き受けるなら実家に帰ると言って拒絶した。
- 9 1 「ここより前の部分」という条件を見落としてはいけない。まずは「山口さん」の話題の部分からさがすべきだと気づけば早かった。ジフ（自負）が自信やほこりのことだとわかっていたら見つけやすかった。妻に言われたことばである。  
2 「ここよりあとの部分」という条件を見落とすと時間がかかる。あとの「あえて」から苦しい仕事といったマイナスイメージのものだと見当をつけられたらどう。ただし「火中の栗」では字数が合わない。
- 10 大変な仕事をなしたとげたと周囲がおどろいているところに、実は十分な勝算があったと述べるとそのすごさが半減するものである。アは直後の「その方」のせりふだが、勝算を隠す理由にならない。成果をあげた成功者取材しているのでウはおかしい。エでは発言の通りだし、勝算はなかったことになる。
- 11 もちろん、楽な仕事では得られない、周囲をおどろかせるほどの大きな成功を収めることができるからである。